魔法少女
りりかるユーミ
PARALLEL ACT

魔法少女りりかるユーミ

もくじ

ユーミ大地に立つ 7

リリアンは危険がいっぱいなの？ . . 25

あとがき 48

イラスト／ロンゲ魔神K

魔法少女りりかるユーミ

「ごきげんよう」
「ごきげんよう」
さわやかな朝の挨拶が、澄みきった青空にこだまする。
マリア様のお庭に集う乙女たちが、今日も天使のような無垢な笑顔で、背の高い門をくぐり抜けていく。
汚れを知らない心身を包むのは、深い色の制服。
スカートのプリーツは乱さないように、白いセーラーカラーは翻らせないように、ゆっくり歩くのがここでのたしなみ。もちろん、遅刻ギリギリで走り去るなどといった、はしたない生徒など存在していようはずもない。
私立リリアン女学園。
明治三十四年創立のこの学校は、もとは華族の令嬢のためにつくられたという、伝統あるカトリック系お嬢さま学校である。
東京都下。武蔵野の面影を未だに残している緑の多いこの地区で、神に見守られ、幼稚舎から大学までの一貫教育が受けられる乙女の園。
時代は移り変わり、元号が明治から三回も改まった平成の今日でさえ、十八年通い続ければ温室育ちの純粋培養お嬢さまが箱入りで出荷される、という仕組みが未だに残っている貴重な学園である。

マリア様に見守られてる筈なんだけど、祐巳の周りには不幸がいっぱい。騒動もいっぱい。こんな事、ＴＶの中だけだと思ってた。まさか自分に降り懸かるなんて思いも寄らなかった。

ユーミ大地に立つ

1

雨が降り続いている。まるで、福沢家の悲しみを現わすかのように。
「お母さん、お茶碗一つ多い」
「あ……　ごめんなさい、ついうっかり……」
「そのまま出しておいてもいいんじゃないか？」
「でも、お父さん……」
「……」
いつも祐麒が座っていた筈の場所に、茶碗だけが寂しく置かれている。祐麒がいなくなってから、一週間近くになる。
いつもの様にお気に入りの青い傘をさして、家の近くのバス停からの帰り道、雨に打たれている学生鞄と傘を見つけた。それは紛れもなく祐麒の物。帰宅してお母さんに訊いても、祐麒は帰っていなかった。もちろん連絡もなかった。
最初は柏木さんに拉致されたのかと思ったけど、違っていた。それに柏木さんなら鞄と傘だけ残していく事はしないだろうし、連絡も来る筈。警察にも通報したが、全然手がかりはなかった。一応祐麒は社長の御曹司なので、身代金目的の誘拐も考えられたが、犯人からの電話は一向にかかってこなかった。
「行ってきます」
朝食を食べ終え、学校に向かう。今日は祐麒は帰ってくるのかな？

2

雨の中、とぼとぼと帰宅する。山百合会の仕事にも手がつかないし、皆気を使って早く返してくれる。けれど、早く帰っても、祈る事くらいしかする事がなかった。
丁度祐麒の鞄を見つけた辺りに、また黒い物体が落ちている。近づいて見てみると、動物だった。毛並は泥で汚れ、ボロボロだ。犬かと思ったが、どうも違う。よく見ると子狸だった。志摩子さんの家くらいならともかく、ここは都会の住宅地。狸が普通にいるとは信じられなかった。誰かの家で飼われていたんだろうか？
「お前、どうしてこんな所にいるの？」

もちろん狸が返事をするわけないのだが、話しかけずにはいられない。それに狸顔としては、狸に親近感を抱いてしまう。

祐巳は、制服が汚れるのもいとわず、狸を抱き抱える。雨に打たれて体温が奪われてるのか、とても冷たい。冷たすぎて震えも起っていない。この子をこのまま放ってはおけない。そんな気がした。

祐巳は家に帰ると、一番にお風呂を涌かした。制服は泥で汚れてしまったので、クリーニング行き。お嬢様学校の制服なのに、一度ならず二度までも泥だらけになってしまった可愛そうな制服。

椅子に腰掛けると、少し温度を温めにして、狸にシャワーを浴びせる。冷えきった身体にいきなり熱いお湯だと、ショックを与えそうだったから、足や手（？）など、心臓に遠い所からゆっくりと洗っていく。かなり汚れていたと見え、流れ出るお湯が黒々と染まっている。

一通りお湯で汚れを流し終ると、風呂桶にお湯を溜め、浸けておいた。幾ら風呂場は温かいとはいえ、自分の身体も冷えている上に裸である。自分の身体も洗っておかないと凍えてしまう。

鼻唄混じりに身体を洗っていると、狸の身体がピクリと動いた。

「あ、起きた？」

祐巳は狸の身体を持ち上げ、正面から覗き込む。まだ意識は朦朧としてるようで、目が虚ろだ。でも段々とはっきりしてきたみたいで、瞼が見開かれてくる。顔をゆっくりと上下に動かしたと思ったら、段々震え出した。私の身体を見て脅えるとは失礼な。

「あ、こら！」

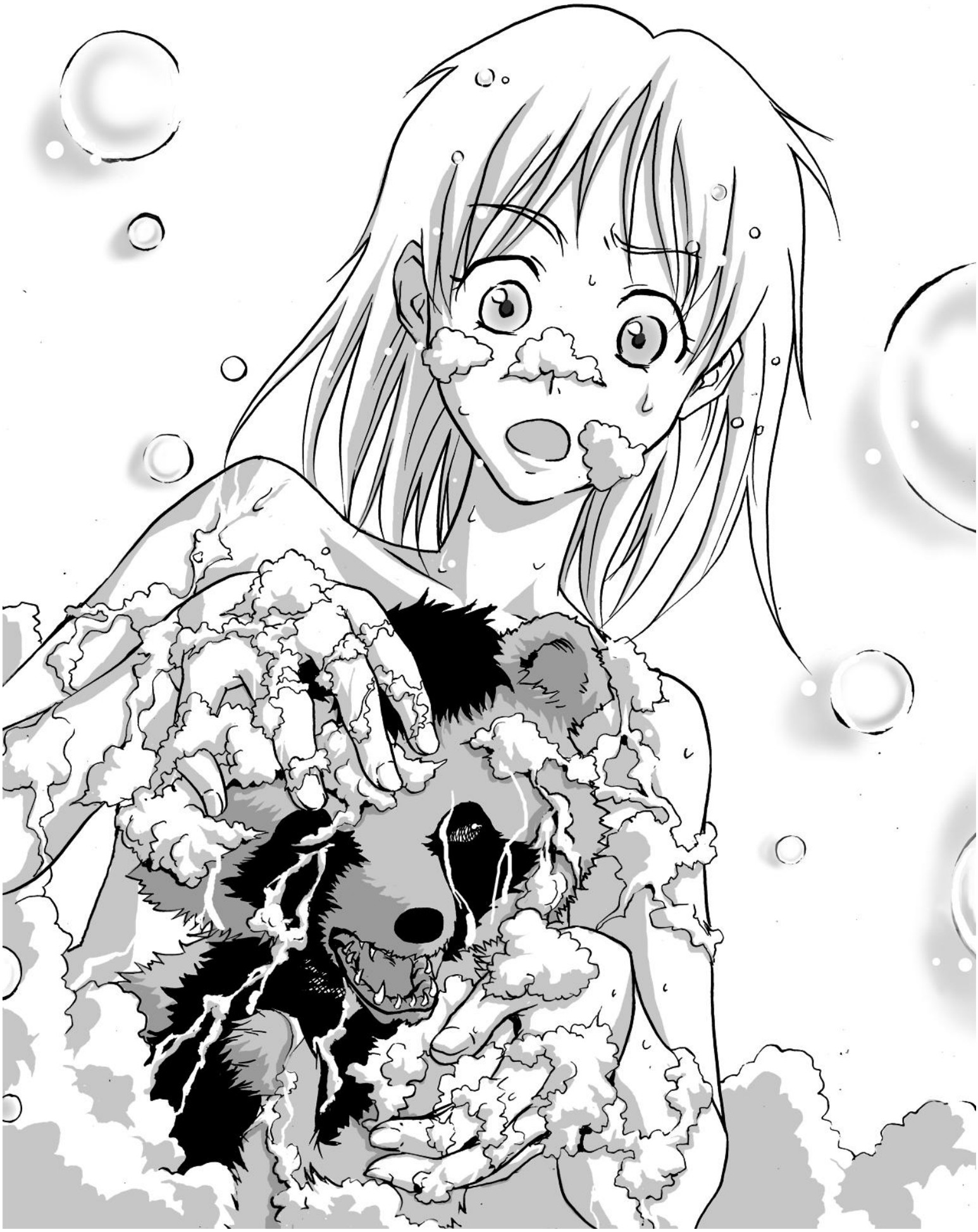
震えが頂点に達すると、急に暴れだした。祐巳の手から離れ、風呂場の隅の方に走り出す。

「待ちなさい！」

一旦隅に追い詰めたかと思うと、腕をすり抜けて、ドアの方にまっすぐ走り出す。しかし、狸の腕では風呂場のドアは開けられない。

「さぁ観念なさい」

祐巳はドアに近づき、狸の首根っこを掴むと、椅子まで戻る。狸は首を横に振って「いやいや」としているが、そんな嘆願は聞かない。風呂桶にボディーシャンプーを入れて泡立てると、狸の全身を洗い始めた。狸も観念したのか、祐巳のなすがままに洗われる。



「仕上げ仕上げ、と」
風呂桶から出して、シャワーで泡を落す。その時に、ある物が目に止まる。
「ん〜？　それっ！」
「⁉」
祐巳は両手で後ろ足を持って、がばっと足を開かせた。
「あ〜　お前オスだったんだ〜　くすっ。可愛い♡」
「●×△■⁉」
思春期の女の子の興味は止まらない。さらにそのモノを「ピン！」と指で弾く。

「ふぅ。いいお湯」
祐巳が湯船に浸かってのんびりとしている横で、動く精神力を無くし、静かに涙を流す子狸一匹……

3

「こら、いつまでも落ち込んでるんじゃないの」
と言って、祐巳は子狸の身体を拭く。でも、落ち込んでる原因は祐巳にあるんだけど。
子狸の身体を拭き終った後、自分も体を拭いて服を着る。お風呂に入った後だから何となくパジャマに着替えたくなるけど、まだ時間が早いので普段着に着替える。
「えっとぉ……。やっぱり、名前ぐらいあった方が良いよね」
飼うことになるかは分からない。元の飼い主が見つかれば、返さなければならない。そうでなければ、野生動物はやっぱり山に返した方が良いだろう。それでも、少しの間だけでも一緒に接するわけで、名前があった方が色々と便利だろう。
「そうねぇ。狸だから、やっぱりコンポコとか」
「それは犬の名前だ」
あれ？　どこからか声が聞こえたような気がする。でも洗面所にもお風呂場にも誰もいない。まさか幽霊？　祐麒が化けて出てきた⁉　そんな、縁起でもない。祐巳は、ブルブルと顔を振ってその考えを否定する。
ピク。急に子狸が顔を起こして、洗面所から走り去った。
「あっ！　待って」
祐巳は急いで子狸を追いかける。子狸はまっすぐ玄関に向かい、外に飛び出した。直ぐ様祐巳も追いかける。パジャマに着替えてなくて良かった。雨は止んでいたが、道路は水溜まりのまま。日没から大分経っているし、分厚い雲のために辺りは真っ暗だ。
暗い中どうにか子狸を追いかけると、近所の公園で立ち

止まっている。
「ちょっと、何してるのよ、急に逃げ出して。せっかく綺麗にしたのに、また洗わなきゃいけないじゃない！」
狸に言っても、人語を解するわけじゃないので、言ってもどうしようもないのだけど、つい口に出してしまう。
「ごめん、祐巳。でも、スレーブが現れるって感じたんだ」
「え？　え？　え??」
「それに、家を戦いの場にしたくないからね」
「た、狸が喋(しゃべ)った〜!!」
そんな、人の言葉を話すのは人間だけの筈で、だから狸が喋るなんてあり得ないわけで。
「そんなことに驚いている暇は無いよ。もうすぐ来るから」
「そんなことって、喋ってるんだよ！　狸が!!」
「これから、もっと驚くよ。ほら」
子狸が顔を向けた先の地面が勢いよく盛り上がる。実際に盛り上がったのは地面ではなく、何だか良く分からない黒い物体。液体のようでもあり、気体のようでもあり、固体のようでもある。その得体(えたい)の知れない物は、祐巳の身長を遥かに越え、四メートルほどにもなった。さらに二つの光る点が水平に現れる。まるで祐巳を睨(にら)んでいるかのようだ。
「きゃあぁ〜〜!!」
祐巳は思わずその場にへたり込んだ。雨が上がったばかりの公園は水浸(みずびた)しで、当然スカートも服も泥水でビショビショになる。でも、そんなことを考える余裕は祐巳には無かった。
「お出ましか……」
「な、な、な、何なのあの化け物!?」
「あれはスレーブ。これから祐巳が戦う相手さ」
「戦うって、私があれと？」
そんな無茶な！　自分の身体の何倍もあろうかと言う化け物と戦うなんてできない。
「そう、他に誰がいる？」
「あぁ言うのはお巡りさんとか……」
「警察は役に立たないよ。あいつを倒すには魔法が必要なんだ」
「魔法!?」
ますます分からなくなった。魔法なんて私は使えない。そもそもこの世にあるの？　あ、でも、目の前に化け物がいるし、ひょっとしたらあるのかも。
「これを使って！」
と、子狸がどこに隠していたのか青い宝石を取り出し、祐巳に投げた。
「これは、サファイア？」

それは大きさ三センチもある、とても大きなサファイア。暗い中でも、わずかな光で美しさが分かる。サファイアと言えばマリア様の心。
「そう。その宝石を胸に当てて、呪文を唱えるんだ」
「呪文なんて知らないわよ」
「俺が呪文を言うから、その後に詠唱して」
「えと…」
「さぁ！　立って!!」
「う、うん」
何だか分からないけど、反射的に肯定し、立ち上がる。スカートの泥を落そうと反射的に手が動いたけど、手もスカートもびっちょりと濡れていて、はたく以前の状態だった。
「……早く洗わないと染みになっちゃう……」
「そんなのどうでもいいから!!　行くよ！」
（これ、気に入ってたのに……）
「さぁ、宝石を胸に当てて」
「うん」
どうして私は狸に主導権を握られてるんだろう？　素朴な疑問は直ぐに掻き消された。
「聖処女のサファイアより溢れし魔力」
「聖処女のサファイアより溢れし魔力」
胸に当てたサファイアから、青く眩しい光が溢れ出てくる。
「糸を紡ぎ織りて、我が服とせよ！」
「糸を紡ぎ織りて、我が服とせよ！」
祐巳の服が、胸の辺りから解けてくる。解けた糸は、光を放ちながら祐巳の身体の周りをぐるぐると舞う。糸の解けは上着やスカートだけに止まらず、下着にまで及び、祐巳は全裸となる。
全身光の糸に包まれたその姿は、とても神々しい物だった。祐巳の身体から離れていた光の糸は、再び祐巳の身体に密着する。今度は、先程とは逆に、胸から距離のあるスカートの裾の方から光が消えていく。
全身から光が消えると、さっきまで祐巳が着ていたのとは別の形の服が現れた。セパレートで深緑のセーラー服にアイボリーのカラー。カラーの縁は真っ直ぐではなく、黒のラインと共に稲妻のように曲がっている。脇には大きく切れ込みが入り、両袖には十時の模様。胸には大きなリボン。青いサファイアはブローチとして、その真ん中に輝いている。下はロングのボックスプリーツスカートで、前と後ろに二本プリーツがある。プリーツの奥は、表の生地と違い白い。
「これは……」
「まだ続くよ！　薔薇の環よ、薔薇の杖となれ！」

「薔薇の環よ、薔薇の杖となれ！」
今度は服が再構成された際に、服の外に出たロザリオが光り出す。数珠の部分が解け、十字架に吸収される。代わりに十字架の下部から光る棒が伸びてくる。十字架自体の形も変わる。光が消えると、杖の先端に十字架が付いた物体になった。
「ロザリオも、変わっちゃった」
「これがローズロッドだよ」
祐巳は、改めて自分の姿を眺める。
「私、変身しちゃった……」
「そう、これで祐巳はパステルユー……」
そこまで言ったところで、慌てて狸の口を抑える。
「いや、さすがにそれはヤバいから」
「じゃあ、りりかるユーミでいいや」
「随分投げやりね」
「そりゃね」
「変身しても、大人になる訳じゃないんだ」
「最近は、変身しても成長しないのが流行りなんだ。それに昔から、小学生の女の子が変身して十七歳くらいになるのが多かったろ？　祐巳は元から十七歳だから成長しなくて良いんだよ」
「なんか損した気分ね。魔法少女になったら少しは成長したいな」
「十八歳が九十歳になった例もあるけど？」
「それは嫌。っていうか、自称なだけで魔女でもないし」
「つぅか四捨五入して二十歳になるような奴が、少女なんて言うなよ…」
「なんか言った!?」
「いや、別に……」
狸が呟いたことを祐巳は聞き逃さなかったが、追求しないことにした。
祐巳は、カラーを指で引っかけて、胸元を覗き込む。
「せめて胸くらい大きくなっててくれれば良かったのに……」
お姉さまのように65Dカップとは行かないまでも、せめてCカップくらいにはなりたい。
「猫耳巨乳小学生と中の人が同じなんて思えないな」
「いや、中の人なんていないから」
「それに胸が小さい事よりも、まだ生えてない事の方を心配しろよ」
ガスッ！　ガスッ!!　ぐりぐり……
「風呂に入れてやってる間、どこ見てたのよ!!」
祐巳は、恥ずかしさと怒りで、顔どころか全身真っ赤になりながら、子狸を踏み躙(にじ)る。しかも革靴で。
よりにもよって、人が一番気にしている事を突いてきた。

プールの着替えでは級友には隠し通せたが、一緒に風呂に入った狸には隠せなかったようだ。
「で、変身したらどんな魔法が使えるの？　淫獣」
もはや原形を止めていない物体に質問する。
「い、淫獣……？」
「そ、あんたなんて淫獣で十分」
「……えと。例えば、嫌いな娘を下痢にするとか……」
「……随分と暗い魔法ね……」
「そうだね」
嫌いな娘を下痢にするなんて、陰湿で後ろ向きな魔法、昔から抱いていたイメージと違いすぎる。魔法と言うよりも黒魔術か呪いといった感じだ。それに、相手を下痢にする魔法で目の前のスレーブを倒せるとは思えない。あれ？
「そう言えば、私なんで変身したんだっけ？」
「それは、現れたスレーブを倒すためだよ」
「変身している間攻撃しないなんて、ちゃんとお約束を守る化け物ね」
「お約束は変身の間だけで、その後の会話まで攻撃しないなんてお約束はないよ」
「えっ？　じゃあ何で攻撃してこないの？」
「それは、攻撃の準備を整えていたからさ」
祐巳は周囲を見渡した。正面にいる巨大なスレーブだけではなく、廻りに高さ三メートル程の長くて黒い物体が、無数に八方を囲っている。
「あわわわ……」
「すっかり囲まれたな」
「気づいてたんなら、もっと早く言ってよ！」
「だって別のこと訊かれてたし」
子狸は、まるで他人事のようにそっぽを向いて答える。さっき踏み付けた事を、かなり根に持っているようだ。
正面の大きな物体には二つの目が光っているが、周りの物体には無い。それらがゆらゆらと不気味に蠢いて、じりじりと攻撃のタイミングを伺っている。
「来る！」
そう叫んで、子狸は祐巳の頭に飛び乗った。ずしりした重みが頭にかかる。魔法少女のお供って、妖精とかフェレットとかが可愛く肩に乗るものじゃなかったのか？
「ぐぇ……　お、重い……」
「ジャンプ!!」
頭に重石を追加してジャンプしろと言うのか？　この淫獣は。でも周りを囲まれてる状況で、空いているスペースは上しかない。しょうがないのでジャンプする事にした。
「えいっ！　ん？　あ？　きゃあぁ!?」
次の瞬間、祐巳は四メートル程の空中にいた。花寺の学

園祭の時の櫓よりも遥かに高い。こんな高さまでジャンプできるなんて、オリンピックの選手だって無理。
　下を見ると祐巳の元いた地面に向かって、黒い物体が一斉に突っ込んでいた。もし、もう少し躊躇していたら、確実に餌食になっていただろう。
「何これ!?　飛んでる！」
「身体能力も上がってるし、魔法力も無意識だけど少し加わったんだ。意識して魔法を使えるようになれば、ちゃんと飛べるようになる……」
「きゃあぁぁ！」
　まだ祐巳はジャンプに毛が生えたレベルしか出来ないため、自然落下で高度が下がってくる。その最中にバランスを崩して、思わず悲鳴を上げる。
「ちゃんと姿勢を保って！」
　そう言われてもどうすれば良いか分からない。なんとか頭からでなく、足から着地することができた、かに見えた。
　ズボボボボ……
「嫌あぁ！　何これ!?」
　祐巳は腰まで地面に埋まってしまった。雨が降ってたから地面が濡れているとは言っても、泥沼のようになっているなんてあり得ない。
「スレーブめ、こっちが戦いにくいように地面を泥沼に変えたな」
「これ、どうすれば良いの」
　祐巳はもがくが、動けば動くほど地面に減り込んでいく。着地した時は腰までだったが、胸の辺りまで埋まってしまった。
「こりゃ、ちゃんと浮遊の魔法を使うしかないな」
「それ、どうやるの？」
「残念だけど、覚える時間は無いみたいだ」
「きゃーー！」
　さっきまで祐巳がいた場所をまさぐっていた黒い物体が、現在祐巳がいる場所に気づき、一直線に向かってくる。しかし、しっかりと泥沼にはまっているので、避けることができない。
　祐巳がいる場所に黒い物体が突っ込む。泥の爆発が起り、泥の固まりが四散する。衝撃の大きさと、泥の柔らかさから、巨大な穴が開く。そこに祐巳の姿はない。
　祐巳は、数メートル後方にうつ伏せで倒れていた。その上から、バラバラと小さな泥片が降り注いでいる。地面が泥沼に変えられたのは、スレーブの周りだけだったらしく、祐巳が倒れている場所の地面は固いままだった。
「うぅ……　なんで私がこんな目に……」

ぎりぎり直撃を免れたが、泥と一緒に吹き飛ばされたダメージは大きい。泥に埋まっていた胸から下だけでなく、顔まで泥まみれになってしまった。
「どうにか助かったな、祐巳」
「あんた、私を置いて逃げたでしょ」
祐巳は、近づいてきた狸の首を掴んで締め上げる。
「そ、そんな事ないよ……」
「嘘！　当たる直前に頭が軽くなったもん」
「それより、次のスレーブの攻撃が来るよ」
「後で覚えときなさいよ」
祐巳は仕方なく立ち上がり、スレーブに向かって構える。さっきの衝撃が残っていて、まだ少しふらつく。
「で、どうすれば良いの？」
「一度魔法を起動したから、簡単な魔法なら一単語（ワンワード）や、呪文無しでも集中するだけで使える。高度な魔法は呪文が要るけど」
「呪文無しでどうやるの？」
「魔法を使うイメージをして、魔力を集中させるんだけど……　『障壁（シールド）』!!叫んで！」
「え？　あ？　障壁（シールド）!!」
レクチャーの最中に再びスレーブの攻撃が来た。杖を前にかざし、杖の先端と迫ってくる物体に意識を集中させる。杖の先端が光り、同時に祐巳の周りを薄く光る半透明の円蓋（ドーム）が囲った。
スレーブの腕なのか触手なのか、黒い物体が次々と円蓋（ドーム）に激突する。その度毎に、黒い、触手と言うには太い物体が火花と共に弾（はじ）かれる。
「最初は一単語（ワンワード）魔法の様な簡単な魔法で、魔力の制御方法を覚えるんだ。段々と祐巳の身体や意識の奥から、魔力や展開式も浮かんでくるよ」
「お、お願いだから黙ってて。集中できない……」
「ごめん」
えっと、要するに魔法を練習すると、自分で新しい魔法が使えるようになるって事かな？　と考えていると、触手の一つが障壁（シールド）を越え、三十センチ程めり込んだ。慌ててその部分に意識を集中すると、めり込んだ部分が切断され、祐巳の隣にボトリと落ちる。
触手が千切（ちぎ）れた痛みがスレーブにも有るのか、悲鳴を上げて全ての触手が攻撃を止めて引っ込む。
「今だ祐巳！　『炎集いて刃となせ！　炎矛（えんむ）!!』」
「炎集いて刃となせ！　炎矛!!」
再び杖の先端が光り、その周りに紅色の炎が集まり出したかと思うと、炎が一気に伸び、杖の長さ自体の、二倍以

上の長さになった。
「なんて長さの矛だ……」
小狸は、思わず感嘆の声を上げる。が、浮かれている暇は無い。祐巳はスレーブの本体――多分目が付いている物体――に向かって走り出す。触手が祐巳めがけて迫るが、それらの上をジャンプして飛び越える。そして、そのまま本体に向かって炎矛を振り下ろす。
「てえぇぇい!!」
炎矛がスレーブの身体を引き裂く。切れ目は炎で焼かれ、体液は沸騰し、煙を上げる。辺りに生き物の焼ける嫌な匂いが立ち込める。スレーブは全身痙攣(けいれん)して悲鳴を上げ、消滅した。スレーブの破片や、飛び散った体液も無くなり、文字通り消滅した。
「はぁ……　はぁ……」
炎矛の炎が消ると、祐巳は両膝両肘をついてうなだれた。初めての戦闘が終わって息が荒い。
「凄いよ祐巳。まさかあんなに大きな炎が出るなんて思わなかった」
「そ、そお?」
全身疲れ切っている中で褒められると、疲れが和(やわ)らぐ。
「意外に才能があるね。志摩子さんが何故祐巳を選んだか分かったような気がするよ」
「え?」
今、祐巳の親友の名前が挙がったような気がしたが、その思考は小狸の次の科白で中断された。
「最後の仕事だ。『隠れし種よ、我が前に姿を現せ』」
「隠れし種よ、我が前に姿を現せ」
祐巳の目の前の風景が少し歪んだと思うと、その場所に二センチくらいの植物の種が現れた。形は、たまにお父さんが酒のつまみで食べる銀杏(ぎんなん)の種にそっくり。
「この種、銀杏の種みたい」
「そう、それは銀杏の種だよ」
銀杏と言えば、お姉さまがお嫌いで、志摩子さんな大好きな食べ物。あれ、さっきも志摩子さんの名前が出たような。
「うっ……!」
その時、小狸が苦しみ始めた。胸を押さえて丸まっている。
「ちょっと、どうしたの?」
「ぐぅ……」
背中を押さえて様子をうかがうと、むくむくと小狸の身体が大きくなり始めた。全身の毛が薄くなり、手足も伸びてきた。でも顔は狸のまま。いや違う。
「祐麒!?」

十六年見慣れた弟の顔だった。

「祐麒!? 祐麒！ 本当に祐麒なの!?」
「本当さ、紛(まぎ)れもなく福沢祐麒だよ」
祐巳は、一週間ぶりに再開した弟の身体を力の限り抱きしめて、涙を流す。
「今までどこ行ってたのよ? みんな、みんな心配してたんだから」
「いてて、痛いよ祐巳……」
「あ、ごめん」
と、身体を離すと視界が広がり、祐麒の身体が目に入る。
「裸……」
「うわ！ そ、そりゃあ今まで狸だったからね」
祐麒は慌てて胡座(あぐら)をかき、大事な部分を手で隠した。幾ら姉弟とはいえ、全てを曝(さら)け出すのには抵抗があるのだろう。全てをさらけ出す……?
祐巳の記憶の倉庫から、子狸を、いや祐麒を風呂に入れた記憶が取り出される。その際は、お互いの全てを晒(さら)し、全てを洗った。さらに祐麒の大事な所を……
この事実に気づいた祐巳は、まずは青ざめ、次に沸いてきた恥ずかしさと怒りで真っ赤になる。

「祐麒、あんた、私と一緒にお風呂に入ったわね……」
「そ、それは祐巳が無理矢理入れたんじゃないか！」
「知らない！」
祐巳の右ストレートが綺麗に決まる。
「うげ！ 俺はちゃんと逃げ……」
今度は膝蹴(ひざげ)りが胸に決まる。
「げふ…… げふ……」
その後も祐巳による折檻(せっかん)は続き、気が付いた時には祐麒は再び元の狸の姿に戻り、痙攣していた。
「り、理不尽だ。俺は被害者なのに…… 魔法少女がみんな小学生の意味が分かったような気がする……」
祐麒は、最後の一言を振り絞ると、意識を失った。

公園の隣の電柱。その上に一人の少女が立っていた。
「やりますね、祐巳さま。流石(さすが)志摩子さん、人を見る目がある」
そう言い残すと、少女はおかっぱ頭を翻(ひるがえ)して電柱から消えた。

4

「う……　ん？」
「あ、気が付いた？」
祐巳は、子狸、いや祐麒が目を覚ました事に気づく。気絶した祐麒を連れて帰り、再びお風呂に入れ、祐巳のベッドに寝かせておいた。こんな時は、狸の姿の方がありがたい。人間の姿なら、とても祐巳一人で祐麒を連れて帰る事なんてできなかった。
「綺麗になってる」
祐麒は、自分の身体を見回すと、怪訝そうに呟く。
「またお風呂に入れてやったの。ベッドが泥で汚れたら困るでしょ」
「また風呂に入れたのか？　じゃあ、さっき俺は何故殴られたんだよ」
「気絶してたら私の裸見ないでしょ」
「じゃあ、俺は風呂に入るたびに気絶させられるのかよ」
「甘えないでよ。次からは一人で入るの」
「狸が自分で身体を洗えるかよ」
そりゃそうだ。自然界なら風呂に入らなくても、水浴びだけでも良いけど、家で飼うのならちゃんとシャンプーで洗わないといけない。けど、幾ら知能は人間とはいえ、狸の身体でそれは不可能な事だった。
「そうね。じゃあ、お風呂場に棘付き鋼鉄バットでも置いとこうかな」
「撲殺する気かよ！」
「大丈夫。呪文唱えれば生き返るよ。『ぴぴるぴるぴるぴるぴ～』って」
「あれは天使だ！　魔法少女には無理！」
「ちぇっ」
「目をつぶっとけば良いんだろ？　心配なら目隠しさせれば？」
「あ、そっか」
それは残念。ストレス発散に良いと思ってたのに。
「大体、祐巳は見られて困るような裸してないだろ」
「やっぱり撲殺されたいみたいね」
暫くお待ちください。

「じゃ、話してもらいましょうか。この一週間何があったか」
祐巳は、腕を組んで問う。
「……分かった」

顔を腫らせて、祐麒は語り出した。

祐麒は、いつものバス停を降りる。家まではそんなにかからない。雨の所為(せい)で視界が悪く、歩みも遅くなり、普段より長く感じる。

ふと、前の交差点にセーラー服の少女が立っていることに気付く。色白の少女が雨の中立っている様は不気味で、一瞬幽霊かと思った。だが、ちゃんと足もあるし、向こう側が透けて見えるという事もない。それに、色白と言っても青白いわけでもない。さらに、よく見ると姉で見慣れたリリアンの制服だった。近所に、祐巳以外のリリアンの生徒がいないわけではない。しかし、登下校中に会うことは稀(まれ)であったし、特に待ち合わせに使えそうにない交差点でたたずんでいるのも不思議だった。

近寄っていくと、いや、通り道なので必ず近づくんだけど、それがかなりの美人だと気付いた。しかも見覚えがある。

「ごきげんよう、祐麒さん」

その美人、志摩子さんは首を少し傾け、祐麒に向けて柔らかく微笑(ほほえ)んで挨拶した。

「ご、ごきげんよう」

美人に見つめられて挨拶されるとどぎまぎする。同じく美人の祥子さんに迫られた時はむしろ恐怖を感じたが、志摩子さんからは優しさが感じられて幸せな気分になる。思わず自分に気があるんじゃないか、と誤解してしまいそうだ。

「どうしたんですか？　こんな所で。祐巳は……」

「いいえ、祐麒さん。祐巳さんではなくあなたを待ってたの」

「え、ぼ、僕をですか？」

駄目だ。こんな事を言われたら、ますます誤解してしまうじゃないか。それとも、誤解じゃないのかも。と、淡い期待が浮かぶ。

志摩子さんがワンステップで祐麒の傘の中に入り、顔を近づけ、右手でそっと頬を撫(な)でる。志摩子さんの顔が間近に来て、思わず身体が引いてしまうが、それを背中に回された左手が止める。この時、志摩子さんがさしていた傘が消失していたのだが、祐麒は気付かなかった。

「あなたが、必要なの……」

「え？」

「私の家に来てくださりませんか？」

「ええっ!?　志摩子さんの家にですか!?」

幼稚園からずっと男子校だった祐麒にとって、女子の家

に誘われるのは初めての経験だった。
「お嫌ですか？」
「そんな！　とんでもない！」
「良かった♡」
断る理由がどこにあろう。祐麒は完全に舞い上がっていた。
「じゃあ」
「あれ？」
祐麒の視界が暗転した。

「志摩子さんが色仕掛けを使ったって言うの？」
信じられない。清純を絵に描いたような性格で、しかもシスターを目指す志摩子さんが色仕掛けなんて。
「でも事実なんだ」
「それで、あんたはのこのこついて行ったわけね」
「もし祐巳が男だとして、志摩子さんの誘いを断れるか？」
「……無理」
「だろ」
志摩子さんから色仕掛けで誘われたら、わざわざ自分を男に置き換える必要もなくついて行ってしまうだろう。もし自分が誘ったら……　自分が惨(みじ)めになるだけなので、それ以上考えるのを止めた。
でも、志摩子さんの家ってお寺だよね。お寺でそんなことして良いのかな？
「それで、祐麒はこの一週間志摩子さんと楽しんでたわけだ」
「そんな訳ないだろう……」

祐麒は、腹にくすぐったさを感じて目が覚める。祐麒の学生服とシャツをはだけられ、下着を捲り上げられている。そして露(あらわ)になった腹部に、志摩子さんが何やら筆で模様を描いている。
「な、何をやってるんですか!?」
「あら、祐麒さん起きたの？」
と言いつつ、志摩子さんは筆を止めない。起き上がろうとするが、手足が動かない。なんと、手足が縛られ、祐麒は大の字で固定されていた。祐麒は暴れようとするが、しっかりと固定されてて動けない。首を振った際に床が見えたが、そこにも模様が描かれている。祐麒を中心として、複数の同心円と見た事のない文字が書かれている。
「志摩子さん、これは!?」
「魔方陣を書いているの。直ぐ済むから待っててね」

「魔方陣って……　うひゃ！」
腹に筆で模様を描かれると、こそばゆくて腹が痙攣してしまう。
「あら、ごめんなさい。えぇと、祐麒さんを動物にする為よ」
「ええっ!?」
志摩子さんはにこやかに微笑む。純真さ溢れる微笑みからは、悪意は全く感じられない。祐麒は、「動物にする」と言う言葉への疑問よりも先に、志摩子さんの天然さに本能から恐怖を感じた。しかし、段々とその言葉の意味の不可思議さに気づく。
「『動物にする』って、どういうことですか？」
「魔法少女にはお供の動物が定番でしょう？」
「へ？」
さらに疑問が増えた。
「魔法少女？　何の冗談ですか？」
「冗談じゃないわ。本気よ」
この人は本気だ。祐麒は直感した。
「あら、やっぱり足らなくなったわね。仕方ないわ」
志摩子さんは、祐麒の腹いっぱいに魔方陣を描き終ると筆を止めた。どうやら、狭い腹だけでは描ききれなかったようだ。そこで志摩子さんが「えい」と言って、軽く筆を振ると、祐麒の服が全て消滅した。当然祐麒は全裸を志摩子さんに晒したことになる。
「うわわっ！」
「心配しないで、動物に洋服は必要ないから」
（そういう問題じゃない!!）
さらに志摩子さんは、魔方陣を描き進める。胸に描いた後、下半身に描き始める。
「あら、可愛い♡」
「!?」
「そうだ、最近流行りのフェレットにしようかと思ってたけど、狸にしましょう。その方が大きいし、顔も似てるし」
「……」
男としてのプライドを砕かれ、抵抗する気力が無くなった祐麒は、志摩子さんのなすがままに狸にされた。もっとも、この数日後、実の姉にさらにプライドを砕かれる事になるのだが。

「……誰でも、考えることは一緒なのね」
そう言って、祐巳は視線を下に逸らす。
「止めろよ」
と言って、祐麒は後ずさる。

（人間のを見て平然としていた志摩子さんと、動物のをいじった祐巳とどちらが上だろう？）
祐麒が女性の本性に苦悩しているとも知らず、祐巳は続ける。
「それで、志摩子さんに狸にされたってわけね」
「あぁ。それから、狸に変えた目的や、魔法の鍛練（たんれん）を一週間みっちりと受けさせられたよ」
「目的って？」
「祐巳を魔法少女にすることさ」
「だったら、私を直接魔法少女にすれば良いのに」
「魔法少女への変身は、お供がサポートするのが決まりだからって」
確かに魔法少女へのキッカケは、お供が定番。でもそれは異世界からやってきた小動物とか、妖精とかで、実の弟を動物にするなんて聞いた事がない。
「で、私は何をすれば良いの？　さっきみたいに戦うの？」
「そう。でも戦いは目的じゃないんだ。一番の目的は、銀杏の種を集める事」
「あぁ、さっきのね」
と言って、祐巳は銀杏の種を取り出した。
「これを集めるの？」
「そう」
「集めてどうするの？」
「何でも、アンゴルモアの大王が地球を破壊しようとしてるから、それを防ぐ為だって」
「アンゴルモアの大王？　随分懐かしいね」
ノストラダムスの大予言って、子供の頃は良く話題になってた。でも、『いばらの森』が話題になった後だったと思うけど、結局何も起きなかった。
「でも何で銀杏の種で防げるの？」
「ただの銀杏じゃないんだ。特別で強大な魔力が封じ込められてるんだって」
「ふぅん。こんなのにねぇ」
と、祐巳は銀杏の種をしげしげと眺めた。どう見ても普通の銀杏の種だ。
「その魔力のために、俺はさっき人間に戻れたんだ」
「じゃあ、銀杏の種を集めないと祐麒は人間に戻れないの？」
「いや、いつもで人間に戻せるらしい」
「え？　じゃあ……」
「でも、祐巳が銀杏を集め終るまで人間には戻さないって……」
「志摩子さん……」
「サポートは動物の姿じゃないと出来ないからだって」

「そうなんだ。じゃあ仕方ないね」
（本当は祐巳を縛るためだと思うけど、言わない方が良いんだろうな）
　それでも水臭い。私に直接言ってくれれば良いのに、と祐巳は思った。志摩子さんが祐麒さんを調教、じゃなくて特訓してた事を言ってくれたら、この一週間心配せずに済んだのに。
「それで、あのスレーブとか言うのは何なの？」
「敵だよ。俺達が銀杏を集めるのを妨害するんだ」
「毎回あんな化け物と戦わなくちゃいけないんだ」
　今回は泥まみれになりながら、どうにか倒せた。毎回泥まみれになるなんて嫌だ。
「化け物とは限らないよ。今回たまたまあの形だっただけで、次はどうなるかは分からない」
「そうなんだ。良かった」
「今回は俺達が銀杏を集めたけど、もし敵の手に落ちたら」
「落ちたら？」
「地球はドカーン」
「そんな⁉」
「そうならないためには、敵より先に銀杏を集めなければならない、祐巳が」
「……うん。分かった」
　なんか、壮大な使命を与えられてしまった。正直、このまま続けられるか、ちゃんと銀杏を集められるか不安になる。
「じゃあ、もう今日は遅いし、寝ようか」
「うん。って、何で私の布団に入ってんの？」
「え、だって」
「だってじゃない。自分の部屋があるんだから、ちゃんと自分のベッドで寝なさい」
　と言って祐巳は祐麒を部屋から追い出した。仕様がなく祐麒は自分の部屋に行くが、狸の姿ではドアノブに届かない。祐麒は、一週間ぶりに我が家に帰って来れたにも関わらず、固く冷たい廊下の床で寝る羽目になった。

リリアンは危険がいっぱいなの？

1

放課後、祐巳は二年藤組に赴(おもむ)いた。ここは志摩子さんがいるクラス。教室を覗いてみると、未だ彼女はいた。
「あら、祐巳さん。どうしたの？」
「ちょっと良い？　訊きたい事があるんだけど」
「良いわよ。どんな事？」
「ここじゃ何だから、ちょっと来てくれる？」
二人は笑顔で会話を交わす。端から見ると白薔薇(ロサ・ギガンティア)さまと紅薔薇(ロサ・キネンシス・アン・ブウトン)のつぼみがいつものように和やかに会話している様に見えるかも知れない。
祐巳は講堂の裏に志摩子さんを連れ出した。以前二人でよくお弁当を食べた場所だ。滅多に人は来ない。
「それで、訊きたい事って何なの？」
「祐麒の事」
「祐麒さんの事？　未だ見つからないんでしょう。心配ね」
「昨日帰ってきたの」
「まぁ、それは良かったわね」
「それが、変わり果てた姿でね」
「そんな⁉　祐麒さんお亡くなりになったの⁉」
「……」
志摩子さんは、祐麒の名前を出しても顔色一つ変えない、それどころか本気で心配しているように見える。
「祐麒、出てきて」
祐巳は、予め待機させておいた祐麒を呼び出した。人間の男の姿だと許可がないと校内には入れないが、狸の姿だと出入り自由だ。実はおいしいかも知れない。そのことを言ったら、祐麒は怒っていたけど。
「あら、狸？　校内で珍しいわね」
と言って、また志摩子さんは顔色を変える様子がない。むしろ手招きで呼び寄せている。
「私の家だと、たまに出るんだけど」
そう言って、志摩子さんは祐麒を抱(だ)き抱(かか)えた。祐麒は純情なので、志摩子さんの（祐巳よりふくよかな）胸が当たって緊張している……　様には見えない。祐麒の顔が、こわばっているのは、緊張と言うよりもむしろ恐怖だ。私は弟を信じる事にした。
「へぇ。志摩子さんの家だと狸が出るんだ」

「えぇ、親子の狸とか、可愛いわよ」
「それで、よく抱(だ)っこしてるの？」
「えぇ」
「野生の狸を？」
「……」
志摩子さんは無表情で黙っている。祐麒がカタカタと震えている。
「そう……　やっぱり喋ったのね、祐麒さん」
祐麒の震えがますます大きくなる。
「祐麒さん、口は硬いと思ってたのに……」
志摩子さんの様子がおかしい。いつもの穏和な志摩子さんではない。不気味な笑みを浮かべている。祐巳は思わず唾(つば)を飲む。
「志摩子さん、やっぱり……」
志摩子さんは、祐麒を放してゆっくりと立ち上がった。
「きゃあああ～～!!」
その時、巨大な悲鳴が聞こえてきた。
「何!?」
祐巳は思わず悲鳴の方向を見る。お聖堂(みどう)の方だ。その時、志摩子さんが軽く肩を押す。
「ユーミ、出番よ♡」
祐巳は確信した。祐麒が言っていた事は本当で、志摩子さんが祐麒を狸にしたんだと。

時は少し遡(さかのぼ)る。お聖堂の隣を、おかっぱの少女と、長身で長髪の少女が歩いている。
「乃梨子さん、何ですか？　こんな所に呼び出して」
「可南子さんに少しお願いがあるの」
「お願い？」
乃梨子さんが可南子を呼びつける事は珍しい。それに乃梨子さんは何でも一人で出来るので、可南子に頼み事をすることは余り無い。まれに瞳子の事や山百合会の事を口にする事はあるが、その様な頼み事を受ける気はない。
「このお聖堂のてっぺん、銀杏の種が有るの見える？」
「銀杏の種？」
可南子はお聖堂の上に向かって目をこらす。可南子の視力は悪い方ではないが、何メートルも離れている場所の、ほんの数センチの大きさの物を見分けられる程良くはない。
「そんな物見つけられる訳ないでしょう？　それで、銀杏の種がどうかしたの？」
「取ってきて欲しいの。可南子さん背が高いでしょう？」
可南子は鼻で笑う。
「乃梨子さん、私を馬鹿にしているの？　あんな高い所に

背が届く訳ないでしょう？」
　乃梨子さんが身体的特徴をネタにした冗談を飛ばす事は珍しい。好きでこんな身長になったわけではないので、正直不愉快だ。そりゃバスケの役には立っているけれど。
「いいえ、可南子さん。あなたなら届くわ。だってあなたは、とっても背が高いんですもの」
　そう言って、乃梨子さんは可南子の肩を叩く。
　背が高いと言っても一七九センチ。そんなに高くは……と可南子が思っていると、段々と視界が変わってきた。足下が遠くなる。
「え？　あ？　あれ？」
　乃梨子さんが段々と小さく遠くなっていく。それだけじゃない。周りの木々が目線よりも下になっていく。いつの間にか、お聖堂のてっぺんが目の前に来てしまった。
　可南子は、辺りを見回した。みんな小さい。そうではなく、自分だけが巨大化してしまった事に気づいた。
「きゃあああ～～!!」
　姿だけでなく、悲鳴までも巨大になった。その悲鳴は、学園内に収まらず、周辺まで響いた。
　祐巳はお聖堂に向かって急いだ。スカートが翻るが、そんな事を気にしてはいられない。その脇を祐麒も走っている。やっぱり狸の方が体力がある。息を切らしている様子はない。
「今の悲鳴なんだろ？」
「分からないけど、スレーブの被害者じゃないかな？」
「じゃあ、また昨日みたいに化け物が暴れてるの？」
「多分そうだ。急がないと」
「うん」
　植木林を抜けると視界が広がり、お聖堂が見えた。その隣に、同じくらい大きな可南子ちゃんも。同じくらい大きな？
　お聖堂と同じくらいの高さになった可南子ちゃんが、お聖堂の屋根にしがみついて震えている。視界が高くなった分怖いのだろう。足は地面に着いてるけど。
　可南子ちゃんが祐巳に気づいた。
「ゆ、祐巳さま助けて……」
　知らなかった。怖がってる可南子ちゃんって可愛かったんだ。ちょっと胸がキュンとなる。
「可南子ちゃん、どうしてそんなに大きくなったの？」
「わかりません！　そんなの」
「〇大ハンバーグでも食べた？」
「そんなＣＭ今の人は知りません!!」
　巨大化可南子ちゃんが叫ぶと、声も巨大化してちょっと

痛い。段々と可南子ちゃんの側に寄っていくと、ある事に気づいた。
「可南子ちゃーん！」
「今度は何ですか？」
「パンツ見えてるよ」
「⁉　嫌ぁっ!!」
可南子ちゃんは顔を真っ赤にしてスカートを抑えた。巨大化したスカートの風圧はもの凄く、祐巳は吹き飛ばされてしまった。
「あいてて……」
「ああっ⁉　祐巳さま大丈夫ですか？」
「だ、大丈夫だよ……」
祐巳は腰を押さえて立ち上がる。でも、これからどうしよう？
「ねぇ、祐麒。これがスレーブの仕業なの？」
「いや、むしろ可南子さんがスレーブだね」
「えぇっ⁉　スレーブって化け物じゃないの？」
「そうとは限らないよ。色んなタイプがあるんだ。あれは、ただ人間を巨大化させたんだね」
「そっか。早く元に戻してあげないと」
「そうだね。急がないと人も集まってくるし。よし、一旦この場を離れて変身だ」
「離れてって、やっぱり正体がばれると魔法少女じゃなくなったりするの？」
「特にないけど、祐巳は変身シーンを見られたり、変身魔法少女だって周りに知られても平気なのか？」
「やだ」
そんなの恥ずかしい。確かに、変身魔法少女だと噂される生活なんて送りたくない。
「だったら早くこの場を離れるんだ」
「わかった」
祐巳は、再び可南子ちゃんに叫んだ。
「可南子ちゃん。私、先生かシスター呼んでくるから待ってて」
「先生やシスターでこれが何とかなるんですか？」
「わかんない（っていうか無理だ）けど、とにかく呼んでくるよ」
「わ、わかりました」
そうして、祐巳は一旦その場を離れた。

「さぁ、変身だ」
「えぇと、呪文は……」
「忘れたの？」

「あんな長い呪文、一度で覚えられる訳ないでしょ」
「しょうがないなぁ。えぇと……」
「あ、ちょっと待って」
祐巳は、祐麒を制すると、目をつぶった。そして、昨日の変身した時の感覚を思い出す。
「変身」
祐巳がぼそっと呟くと、光りに包まれ、昨日の変身過程をなぞる。そして、魔法少女りりかるユーミに再び変身した。
「二回目で一単語での変身をマスターするなんて、意外とやるじゃないか」
「意外とは余計よ。さ、早く可南子ちゃんを助けるわよ」
「あぁ」
祐巳は、急いでお聖堂へと戻る。

走り去る祐巳さまを見届けた可南子の肩の上に、乃梨子さんが現れた。
「可南子さん。さ、早く銀杏の種を取って」
「乃梨子さん、もしかしてこれ、あなたの仕業？」
可南子は、眉間に皺を寄せながら乃梨子さんに問う。
「あら、何の事？」
「惚けないで！」

可南子は、肩に乗っている乃梨子さんを捕まえようとするが、乃梨子さんは宙に浮いて逃れた。
「浮いてる？」
「驚く事じゃないわ。これくらい簡単よ」
「だったら、私をこんなにしなくても、自分で取れば良いじゃない！」
「そうかもね」
乃梨子さんは、捕まえようとする可南子の腕の間をひらりひらりとすり抜ける。
「あら、もう来たの。それじゃあ私は退散するね」
「待ちなさい！」
乃梨子さんは、ユーミの姿を確認すると、その場を去った。
「後でとっちめてやる……」
可南子は唇を噛んだ。

ユーミは再びお聖堂まで戻ってきた。可南子ちゃんを見上げる。顔が遙か彼方だ。
「ここからじゃ遠いなぁ」
（よし、それじゃあ飛ぶんだ）
「え？　何？」
（念話だ。離れるとサポートできなくなるから、声じゃな

く頭で会話するんだ）
（随分と便利なものがあるのね）
（よし、通じた。祐巳なら直ぐにマスターすると思ったよ）
（おだてても何も出ないわよ）
（美味い飯ぐらいくれよ）
（考えとく……　ねぇ、これって相手の考えてる事を読めたりするの？）
（それはかなりの上位魔法だ。今の俺達には無理だよ）
（……わかった）
今は無理という事は、訓練すれば相手の考えを読めるし、強敵相手だと考えを読まれるという事か。それってかなり怖い。
（じゃあ、飛んで！）
ユーミは目を瞑り、自分が空中を浮く様をイメージする。人間の身体の重心、胸から腰の辺りを持ち上げる。
「えいっ！」
かけ声と共に目を開け、地面を蹴る。その途端にユーミの身体は宙に浮き上がった。ユーミの周りの空間から、白くて細い糸のような物が生まれ、キラキラと舞い降りている。
「うわ、浮いてる」
（上出来だ）
（このキラキラしてるの何？）
（エンゼルヘアと呼ばれる物だよ）
（じゃあ、私って蜘蛛？）
（夢がないな、祐巳……）
（そう言われても……）
「うわわっ！」
しかし、まだ上手くコントロールできない。ユーミはバランスを崩すと、可南子ちゃんの顔に向かって飛んでいく。
「うわぁっ！」
可南子ちゃんは、反射的に腕で顔を覆い、飛んできたユーミを弾き飛ばした。飛ばされたユーミは、近くの木にぶつかる。幹ではなく葉の部分だったのが不幸中の幸い。ユーミは全身擦り傷を負うだけで済んだ。だが、辺りに気まずい雰囲気が漂った。
「あいてて……」
「ご、ごめんなさい」
「い、いいよ。そりゃ、顔に何か飛んできたら驚くよね……」
ユーミは、今度はゆっくりと、しかしふらふらと可南子ちゃんの所に飛んでいった。
「心配しないで、直ぐに元に戻してあげるから」
「あの、あなた誰なんですか？」
可南子ちゃんは明らかに不審がっている。こんな身体にされてしまったのだから仕方ない。

「えっと、私は魔法少女りりかるユーミ♡」
「……」
ちょっとポーズを決めてみた。でも、可南子ちゃんは無反応。
「はあぁ……　もう何がなんだか」
「信じてないね」
「身体を大きくされたかと思ったら、今度は変な格好した女の子……」
可南子ちゃんは頭を抱え、お聖堂に寄りかかる。巨体で寄りかかったために、壁がきしきしと音を立てている。
（祐巳、説明が面倒だ。早い所元に戻そう）
（そうね……）
ちょっと悲しい。それでも、ユーミは杖を振りかざして叫んだ。
「汝(なんじ)のあるべき姿に戻れ！　細川可南子!!」
杖の先端が光り出す。その少し後に、可南子ちゃんの身体も光り出した。
「また何か始まるの？」
可南子ちゃんが不安がるのも無理はない。次の瞬間、可南子ちゃんの姿が消えた。その場に服を残して。
「え？」
「きゃああ～っ!!」

ボス！　っと言う音と共に可南子ちゃんの着ていた制服のお腹(なか)の辺りが変形し、それに吊(つ)られて制服全体が沈み込む。跡には、可南子ちゃんが着ていた巨大な制服の山が出来た。
「え～っと？」
（可南子さんの身体だけ元に戻って、服は戻らなかったんだ……）
（そ、そんなぁ。じゃあ急いで服も戻さないと）
（今戻すと、可南子さんの身体を変に締め付ける事になる。まず可南子さんを救出するんだ）
（わかった）
ユーミは、可南子ちゃんの服の中に潜り込んで、可南子ちゃんを探す。巨大な制服は重くて、中は非常に苦しい。早く探し出さないと可南子ちゃんも窒息してしまう。
「いた～」
ようやく可南子ちゃんを見つけ出し、制服の外に引きずり出す。可南子ちゃんは身体が大きいから体重も重い。それに意識を失っている人間はさらに重く感じる。
「見つかった？　なら早く元に……」
「あんたは見ちゃ駄目！」
服は巨大なままだから、可南子ちゃんは当然全裸。祐麒なんかに見せられる筈がない。

「淫獣は銀杏の種でも探してて」
「え？　うわ～っ！」
祐巳は、魔法で祐麒をお聖堂の屋根の上に放り投げる。祐麒が銀杏の種を探している間、ユーミは可南子ちゃんの服を戻そうとする。それにしても、可南子ちゃんって着痩せするんだ、と、ますます自信を無くしてしまうユーミだった。
可南子ちゃんの服を元に戻して着せた後、ユーミもお聖堂の屋根に飛んでくる。
「どう？　種は見つかった？」
「見つけはしたけどさ、なんか俺の扱い酷くない？」
「淫獣に人権は無いの。早く回収するよ」
「……」
自分の存在意義を改めて問い直す祐麒であった。

「ん？　あ……」
「気が付いた？　可南子ちゃん」
「ここは？　私は一体何を？」
「お聖堂の横。悲鳴がしたんで来てみたら可南子ちゃんが倒れてたの。一体どうしたの？　心配したよ」
祐巳は、未だ虚ろな可南子ちゃんを覗き込む。
「確か私巨大化して……痛た。その前に乃梨……あ痛た……」
「考えないで。休んでた方が良いよ。悪い夢見てたみたいだし」
「夢……？　あれは夢？」
「そう、夢。心配しないで私付いてるから」
「祐巳さま……ありがとうございま……ま……」
可南子ちゃんはまた眠りについた。どうやら、さっきまでの事を夢だと思ってくれたみたい。でも、さっき言いかけた名前って？
敵も身近な人かも知れない。そう予感した祐巳だった。

2

「ごきげんよう、祐巳さん」
「ごきげんよう、桂さん。久しぶりだね」
桂さんは、一年の時は同じ桃組だったけど、二年になって松組と藤組に別れてからは、余り話さなくなった。
「嬉しい。私のこと覚えててくれたんだね。スターになったから、てっきり私のこと忘れてたと思ってた」
「そんな」
一年前、桂さんは「スターは素人のことをいちい

ち覚えていない」と言っていた。そうしたら、私が紅薔薇（ロサ・キネンシス・アン・ブウトン・プティ・スール）のつぼみの妹になってスターの仲間入りをしてしまった。一年の時は毎日会っていたので、その時の科白（せりふ）を頭の片隅に追いやっていたけれども、二年になって疎遠（そえん）になると、後悔でいっぱいになったらしい。

「でも、桂さんもテニス部でレギュラーになったんでしょう？　それも二年で。立派なスターじゃない」

「じゃあ、祐巳さんは私の他のレギュラーの名前言える？」

「えっと、ひろみさんでしょ、麗香さんでしょ、それから……」

「そんなものよ。一年生の時に同級生じゃなかったら、私の名前も知らなかったでしょ」

「……」

「後でサインくれる？」

「え!?」

「冗談よ」

「……」

半年間出番がなかった所為か、桂さんはすっかりひねくれてしまったようだ。

「止めようよ、こんな話は。暗くなるよ」

「そうだね」

お互い同意に達したが、暗い雰囲気は急には改善しない。

「ねぇ、祐巳さん。祐巳さんは親友だと思ってた人から、後ろから撃たれたことある？」

「へ？　なにそれ？」

「私の幼馴染みの男の子がね、生き別れのお兄さんに会ったんだけど、その人はそう言う経験有るって」

「へ、へぇ……」

祐巳は、顔を引きつらせながら答えた。桂さんの知り合いって、ヘビィな人なんだ。

「その人、よっぽど人望無いのね」

「そうだね……」

ますます暗くなって、二人は無言で歩いた。そして、祐巳は薔薇の館へ、桂さんはテニス部の部室に向かうために別れた。

「桂さん、変わったなぁ」

暫く会わない間にすっかり暗くなってしまった。出番が無いと、こうまで人間荒（すさ）むものなのか。

「祐巳さま避（よ）けてぇぇっっー!!」

えっ!?　と驚いて声がした後ろの方に振り向くと、目映（まばゆ）い閃光（せんこう）が眼前（がんぜん）に広がる。祐巳は悲鳴を上げながら身体を捻（ひね）る。バランスを崩して倒れたその上を電撃が通り過ぎ、祐巳の前にあった木の幹を焦がした。

もし避ける事が出来ずに、そのまま電撃を浴（あ）びていたら

と思うと、恐怖で息が荒くなる。
　ゆっくりと声がした方向、そして電撃が飛んできた方向を見ると、そこに瞳子ちゃんが立っていた。顔は青ざめ、ガタガタと震えている。そして、瞳子ちゃんのトレードマークとも言える縦ロールが、こちらを向いて、煙を出している。
「と、瞳子ちゃん何するの⁉」
「私じゃ、私じゃありません！」
　瞳子ちゃんは首を振って否定する。首を振って顔の方向はずれるが、縦ロールは真っ直ぐ祐巳の方を向きつつ、ゆらゆらと蠢(うごめ)いている。まるで触覚が獲物を見定めているようだ。そして、縦ロールが再び光った。
「きゃあぁぁ！」
　祐巳は転げるように逃(に)げ惑(まど)う。
「瞳子ちゃん、止めて！」
「私じゃ、私じゃないんですぅ!!」
　どうやら、瞳子ちゃんの意志とは無関係に縦ロールが電撃を放(はな)っているようだ。親友だと思ってた人から、後ろから撃たれる。まさか自分が撃たれる羽目になるとは思わなかった。
「今度は、瞳子さんがスレーブになったみたいだね」
「早いわね、祐麒」
「そりゃいつスレーブが現れても良いように、祐巳の近くで待機してるからね」
「実の姉のスートーカー？」
「人聞き悪いな。それとも僕が来るまで一人で戦いたいの？」
「戦闘の時、あんまり役に立ってるとは思えないけどね」
「……」
「そんな事より、早く瞳子ちゃんを何とかしないと」
「あぁ。今は未だ意識があるけど、その内完全に支配されるよ」
　とは言っても、電撃が続けざまに放たれ、変身する隙(すき)もない。それに瞳子ちゃんの前で変身する訳にはいかないし。
「お願い、止めてぇ！　嫌ぁ！　私、私……」
　瞳子ちゃんが泣き叫ぶ。自分の身体がおかしくなった事と、己の意志とは無関係に祐巳を攻撃している事で、相当精神的ダメージが来ているようだ。
「きゃ！」
　祐巳はつまずいて倒れる。そこへ電撃が迫り、避けきれない。
「祐巳さん！」
　突然人影が現れ、電撃がその人影の場所で垂直に地面に落ちる。辺りの煙が次第に晴れてくると、その人影の正体は桂さんだと分かる。でも、何か様子がおかしい。桂さん

の髪から、無数の棒のような物が伸び、桂さんの前方、瞳子ちゃんとの間で地面に刺さっている。その棒を避雷針にして地面に電気を逃したようだ。その棒一本一本には斜めに模様が走っている用に見えたが、地面から引き抜かれた先端部を見ると、一本一本がドリルになっていた。
「桂さん、あなた……」
「祐巳さん、逃げて」
「その髪、どうしたの？」
「私、初等部の頃エイリアン対策係やってたから」
「は？　そんな係、有ったっけ？」
（祐巳、突っ込むな！　ここは早く変身するんだ）
「わ、分かった。桂さん待ってて、人を呼んでくるから」
そう言って、祐巳はその場を離れた。二人が見えなくなった所で、生け垣に入り、変身する。
「段々変身が簡単になるね」
「バンクすら省かれてるって感じだな」
「じゃ、行くよ」
ユーミは、さっきまで居た場所に戻ってくる。
「これは……」
ほんの少しの間いなくなっただけなのに、辺りの様子は一変していた。地面には無数の穴が開き、周りの木々にも焦げ痕やドリルによってえぐられた痕がある。激しい戦闘の跡がうかがえた。
祐巳は、地面に仰向けに倒れている桂さんを発見し、抱き抱える。服は所々焼け焦げていて、顔にも酷い火傷を負っている。
「桂さん、しっかり！」
「誰？　祐巳さん……なの？」
「桂さん、あなた目が!?」
「ごめんなさい、私じゃ無理だった……」
「もう喋らないで！　早く救急車呼ぶから！」
「祐巳さん、最後にお願い、聞いてくれる？」
「何？　何でも言って！」
「私を、挿絵に出させて……」
「ごめん、それ、無理」
「そう……」
桂さんは目を閉じ、身体から緊張が消え、祐巳の腕に体重がかかる。
「桂さーん!!　死んじゃ嫌ー!!」
祐巳の目から涙が溢れ、桂さんの頬を濡らす。祐巳は桂さんの身体を強く抱きしめる。まさか魔法少女の戦いで、人が死ぬなんて思わなかった。それも友達が死ぬなんて。
「ごめんなさい、桂さん。私の所為で……　桂さんは関係

ないのに……」
「うふふ、やっと主役に成れたわ～」
「……」
祐巳は、桂さんを放すと、瞳子ちゃんに向かって対峙した。
「祐巳、この人は生きていたとは言っても怪我人だからな。早く病院に運ばないと」
「……分かってる」
桂さんが死んでいなかったと分かっても、余り嬉しくないのは何故だろう？
「茶番はもういいかしら？」
瞳子ちゃんの表情が変わっている。声も冷たい。いや、以前から暖かいというわけじゃなかったけど。
「新手ですのね。退いてくださる？　私、この人にトドメを刺さないと気が納まりませんの」
瞳子ちゃんが左肩を押さえながら冷たく言い放つ。押さえた手の間から血が流れている。桂さんのドリルは、瞳子ちゃんの左肩を貫通していた。
「瞳子ちゃん！　あなたも怪我してるじゃない!!」
「私の心配より、ご自分の心配をなさったら！」
その言葉と同時に、無数の電撃がユーミに襲いかかる。
「うわわっ！」
声は上げているが、ユーミになって反射神経と運動能力が上がった為に、難なく交わす事が出来る。
「瞳子ちゃん止めて！」
「祐巳、駄目だ。もう完全に別人になってる！」
「ちょこまかとすばしっこい人ですね！」
瞳子ちゃんが一旦両手を合わせたかと思うと、両手の平を地面に着いた。その場所を中心に円形の魔法陣が広がる。
「魔法陣!?」
「いや、あれは錬成陣だ！」
「錬成陣!?」
ユーミの周りの地面が盛り上がり、四方を壁で囲まれる。
「囲まれた！」
「さぁ、覚悟なさって！　触覚ビーム!!」
壁のてっぺんに登った瞳子ちゃんから、電撃が放たれる。逃げられない。
「きゃああっ……　……あれ？」
何ともない。防御魔法とか使った覚えないのに。上を向くと、電撃が瞳子ちゃんとユーミとの間から消失している。
瞳子ちゃんも、祐麒も驚いているようだ。
「これ、何？」
「驚いた。無効化だよ。これは無効化のアリ……　いや、魔法かな」
「祐麒、また変な事を……」

「祐巳、突っ込んだら負けだ」
「……またなのね。分かった」
瞳子ちゃんは、一旦電撃を出すのを止めた。その隙に壁のてっぺん、瞳子ちゃんの目の前にジャンプした。
「ひっ!?」
「さ、瞳子ちゃん、大人しくして」
「嫌ぁっ！」
ユーミが手を伸ばそうとすると、瞳子ちゃんは奇声と共に再び電撃を放つ。でも、電撃は無効化で効かない……
「ぎゃあ！　わわわ……」
筈だったが、電撃をもろに食らったユーミは、ヒロインにあるまじき悲鳴を上げ、落下する。
「む、無効化で電撃は効かないんじゃなかったの？」
「どうやら、発動する時としない時があるみたいだ。無効化には頼らない方がいいな」
「そ、それを先に言って……」
俯せに倒れ、ぷすぷすと煙を上げているユーミに、祐麒が答えた。
「あ～はっはっは！　無様、無様ですわね。まるでヒキガエルの丸焼きみたい」
「……」
ぷち。何かが切れた音がした。ユーミは、ローズロッドに寄りかかりながらゆっくりと立ち上がる。
「……泣かせる」
「え？」
「頭来た。泣かせてやる」
祐麒は、恐怖で姉の顔を見る事が出来なかった。「せいっ」と言うかけ声と共にユーミはジャンプし、再び瞳子の前に現れる。そのまま、ローズロッドを瞳子の左肩に向けて振り下ろす。
「ぎゃぁ!!」
悲鳴が聞こえて数秒後、壁の底にいる祐麒に赤い水滴が降ってきた。祐麒は、上を見る事が出来なかったが、おおよその惨状は理解した。
瞳子は、壁の外に落下する。仰向けに転がり、押さえた左肩からは出血が止まらない。そこへユーミが近づく。
「た、助けて……　ごめんなさい……　許して……」
瞳子は、泣きながらユーミに懇願した。ユーミは、自分のスカートの裾を破いて、細い布を作る。瞳子ちゃんの左肩を押さえている右手を引き剥がすと、血が溢れてくる。今作った布を肩に巻くが、出血は止まらない。
「早くしないと。瞳子ちゃん、ごめん」
ユーミは、瞳子ちゃんの胸元を破る。セーラー服の襟元は、元々破きやすくするための形状とはいえ、制服の厚手

の生地だと破きづらい。胸元を開くと、そこに銀杏の種が埋まっていた。
「酷い……」
ユーミが銀杏の種を取り出すと、瞳子ちゃんは意識が無くなっていた。銀杏を取り出したショックと、出血のショックが同時に来ているのだろう。
「祐麒！」
「祐巳〜　早く助けて」
「あんた未だそんな所にいたの!?」
「しょうがないだろう。この壁高いんだから」
祐麒は、まだ壁の中にいた。ユーミは、攻撃魔法で壁を破壊する。
「俺まで殺す気かよ！」
「あんたは丈夫だから良いの！　それより瞳子ちゃんが」
「こりゃ酷い」
（殆どユーミの仕業な気がするけど）
「聞こえてるわよ」
「とにかく、ユーミは早く変身解除して救急車を呼ぶんだ。その間、瞳子さんは俺が面倒見てる。簡単な治癒魔法くらいは使えるから」
「それ、早く言ってよ!!」
祐巳は急いで変身解除すると、公衆電話から救急車を呼び、瞳子ちゃんに付き添って病院に行った。瞳子ちゃんは、大量の輸血が必要だったが、一命を取り留めた。もし祐麒が治癒魔法で止血をしていなかったら、危なかったかも知れない。
祐巳は、瞳子ちゃんを酷い目に遭わせた敵の黒幕を許さないと決めた。
「トドメ刺したのはユーミだけどな」
「そこ、五月蝿い」
「ところで祐巳、あそこにもう一人女の子がいなかったか？」
「えっと、あそこに居たのは、私と、瞳子ちゃんと、祐麒の三人だけだよ。あ、二人と一匹かな？」
「そうか、だったら良いんだ」
「うん。今度の事件はもう解決」

本当に誰か忘れていませんか？

3

ある日、薔薇の館で祐巳と由乃さんが語らっていると、志摩子さんが写真集を持ってやってきた。

「見て見て、祐巳さん、由乃さん。これ可愛いでしょう？」
「あ、本当可愛い。でも志摩子さん、クリオネ流行ったの大分前よ」
志摩子さんが持ってきたのは、ハダカカメガイ、学名クリオネ・リマキナ、通称「流氷の天使クリオネ」の写真集だった。ブームはもう既に去っていると思うけど、流行から少しずれた所が志摩子さんらしい。
「そんな事言っても、この写真集見つけたの昨日なんだもの」
「じゃあ、今度の日曜日にでも見に行く？」
「え？　由乃さん、クリオネ見られるの？」
「えぇ。都内の水族館にいるわよ」
と言うわけで、三人で水族館に行く事になった。

目的の水族館は池袋にある。池袋は広い上に、ごちゃごちゃしていて待ち合わせるのは大変なので、M駅で待ち合わせることにした。祐巳や志摩子さんはM駅までは通学のための定期があるし、由乃さんも最寄りの駅だから丁度良い集合場所になった。
九時半の集合時間に間に合うように、九時二十分にM駅に着くと、志摩子さんが待っていた。訊いてみると、九時にはもう着いていたそうだ。志摩子さん、気合い入り過ぎ。
少し遅れて、由乃さんがやってきた。やってくるなり、令さまが見当たらなかったと捲し立てる。令さまと一緒に水族館に行くわけではないが、令さまがこそこそと何かしているのが気に入らないらしい。そんな、令さまは由乃さんの所有物じゃないんだから。
十時過ぎに池袋駅に到着。水族館の開館も十時からだから、開館には間に合わない。志摩子さんは開館と同時に入りたがっていたけれど、説得して少し遅めにした。
東口から、東急ハンズの横を通って、サンシャインビルを目指す。横断歩道を渡ると、茶色いタイルの建物が見えてきた。
「この階段、スペイン階段って言うんですって」
「スペイン階段って、イタリアにあった？　全然似てないね」
こちとら修学旅行で本物のスペイン階段を見てきて、座ってきたんだ。
「どうせだから登って行く？　偽物には偽物なりの風情があるかもよ」
「そんな、由乃さんそう偽物って連呼しなくても」
「偽物は偽物よ。全国に富士山の偽物はあるけど、やっぱり本物には敵わないわ」
そうだった。由乃さんは本物の富士山に登ったんだった。

スペイン階段を登ると、由乃さんが絶句して立ち止まる。
「何？　これ？」
サンシャイン広場には、数千人の男性が集まっていた。それが広場の至る所に列を作って並んでいる。
「何でこんなに人がいるの？」
「クリオネって大人気ね」
「いや、志摩子さん、それはないから」
そういや祐麒に、池袋にクリオネを見に行くと行ったら、とても悔しがっていた。狸の姿じゃサンシャインに行けないって。
「これだけ男性がいると恐いわね」
「そんな、恐いなんて」
そう言って、由乃さんが祐巳の腕にしがみついてきた。由乃さんの胸の感触から、安心すると共に、少し優越感を覚えたのは秘密。
幼稚舎からずっと女子校だった由乃さんは、数千人の男性の群れを見たことがない。あ、共学でも普通はないか。祐巳も数千人の男性に囲まれて恐怖を感じていないわけではないが、とても口には出せない。それこそ「恐い」ことになりかねない。
「由乃さんは道場にいる男性で、少しは慣れてるんじゃないの？」
「こんなに沢山はいないわよ。祐巳さんは平気なの？」
「平気って訳じゃないけど……」
祐巳は辺りを見渡す。こちらに関心を持っている人はいなさそうだけど、聞かれたらと思うとヒヤヒヤする。
「祐巳さんはビッグサイトで見慣れてるでしょ？」
「私、三日目は午後からしか行ったことないから……　って!!」
祐巳は慌てて志摩子さんの口を塞ぐ。
「何、何のこと？」
「そんなことより、早く行きましょう？　ほら、あの中にエレベーターがあるから」
祐巳は焦りながら、ワールドインポートマートと書いてあるビルに進み出す。
「祐巳さん、ここに来たことあるの？」
「そりゃ、映画とか買い物とか、何度か」
「そう、買い物にね。くすくす」
お願い志摩子さん、事情を知ってるなら黙ってて。

入場券を買って水族館の中に入る。中に入ると言っても、ビルの屋上なので、空も見えて奇妙な感じだ。そもそも都会のビルの屋上に水族館があること自体が不思議な感じが

する。普通は海の側にあると思うんだけど。
天幕(てんまく)がかかった通路を歩いて行く。左を見ると、板張りの床に椅子が並んでいるが、朝早い所為かあまり人はいない。
流石に水槽は建物の中にある。突き当たりを右に曲がって入って行く。明るい場所から建物の中に入ったことと、元々照明が落してあるために真っ暗だ。
正面にはイルカの水槽が、右手には亜熱帯の魚を集めた水槽がある。
「クリオネはどこかしら？」
三人は入り口近くに置いてあったパンフレットを見るが、それらしき場所は書かれていない。
「期間限定って言うから、もう展示終っちゃったとか」
「そんなことないわ。だって幟(のぼり)には『クリオネ公開中』ってちゃんと書いてあったもの」
志摩子さんはワールドインポートマートのビルの壁にかかっていた幟のことを言った。祐巳は焦って全然気づかなかったけど。
「あ、あれじゃない」
「本当！」
右手にあった亜熱帯の水槽のさらに右側、つまり入り口から入って振り向いた所にクリオネの水槽はあった。
「こんな所に」
「まるでひっかけね」
クリオネは、他の貝の仲間や、解説のパネルの中央に展示してあった。円形の窓の中で、白くて小さな生き物が動いている。
「へ～。可愛い♡」
「随分ちっちゃいのね。もっと大きいかと思ってた」
クリオネは小指の先っぽくらいの大きさ。それが水槽の中を泳いでいる。
「ちっちゃくて、よく見えないね」
祐巳は水槽に近づいて目を凝らす。元々冷たい氷の海にいる生き物、水槽の温度も低くて表面が曇(くも)り、さらに見づらくなっている。
「そんなことないわ。大きいわよ」
「そう？」
志摩子さんにとっては、これが大きいのだろうか？
「ほら」
「あれ」
祐巳は目を擦(こす)った。さっきよりも大きくなっているような。気のせいかな？　と思っていると、どんどん大きくなっていった。見間違いじゃない。
「うわ、わ、わ！」
祐巳は急いで水槽から離れる。クリオネの身体が水槽いっ

ぱいになったかと思うと、アクリルガラスが割れ、そこから飛び出した。なおもクリオネは巨大化している。
「きゃ〜!!」
祐巳だけじゃなく、周りからも悲鳴が聞こえる。辺りは大混乱となり、祐巳達も外に飛び出した。クリオネはさらに巨大化し、追ってくる。
「由乃、大丈夫!?」
「令ちゃん！　なんでここに!?」
「由乃を見かけて、胸騒ぎがして追ってきたら……」
「だからなんでいるのよ!?　どこで見かけたの!?」
「そ、それは……」
令さまが由乃さんから目を逸らした。
「言えないような場所……。あ、ちさとさん……」
「ご、ごきげんよう。由乃さん」
由乃さんが、令さまの後ろに隠れていた田沼ちさとさんを発見した。しかもちさとさん、薄茶色と白を基調にし、随所に花柄が散りばめられたフリフリのワンピースを着ている。
（これ、ピンクハウスだよね？）
さらに祐巳は、令さまとちさとさんが胸にお揃いのシールを貼っているのに気づく。
（あはは、そう言うことか……）
祐巳は事情に気づいて脱力した。
「なんでちさとさんが一緒にいるのよ!?」
「そ、それは……」
「二人でデートしてたの!?」
「それは違……。危ない！」
令さまが由乃さんを突き飛ばす。そこに見上げるくらい巨大になったクリオネの腕が振り下ろされた。床の板が一瞬で砕け散る。
「ちさと、行くよ！」
「はい！」
「呼び捨てにした〜!!」
怒り続ける由乃さんを尻目に、令さまとちさとさんが呪文を唱え始める。
「紅かる心、風を纏いて、契り籠ん」
呪文を唱え終ると、ちさとさんの身体が一瞬消滅する。次に令さまの右腕に光が舞い、身の丈ほどもあろうかという大刀になった。
「リ、同契……。令ちゃんとちさとが同契した〜！」
もはや由乃さんはちさとさんを呼び捨てにしている。
「しかも初めての同契じゃない！」
「由乃、そんなことはどうでも良いから早く逃げて！」
令さまが巨大クリオネに対峙する。

「どうでも良くないわ」
由乃さんがどこから取り出したのか、日本刀を抜いた。
「ふふふ。今宵の虎徹は血に飢えておる……」
「由乃、その刀どこから⁉　それに銃刀法違反！」
「今の令ちゃんに言われたくないわ！」
と叫んで、由乃さんは令さまに斬り付けるも、令さまは簡単に受け止める。
「由乃、真剣は危ない！」
「大丈夫、私は医者だから、ちゃんと長所を突いてあげるわ！」
もはやどう言う論理か分からない。
「きゃあっ！」
「きゃっ！」
「由乃、大丈夫？」
令さまが由乃さんを吹き飛ばし、由乃さんが壁に激突する。その時、二つの悲鳴が聞こえた。令さまが心配して駆け寄ろうとしたが、途中でその足が止まった。
「あ痛た……」
「あ～びっくりした」
「ん？　菜々、どうしてここに⁉」
由乃さんが打った背中を押さえながら声のした方を振り向くと、セミロングの髪の少女が倒れていた。菜々と呼ばれた少女も腕を打ったらしく、さすりながら立ち上がった。
「すみません。何か面白そうな事が起りそうな予感がしたので、由乃さまについてきたんです。そしたら、本当に面白い事が起りました」
「菜々、あなたね……」
由乃さんが呆れてため息をついたところで、令さまが呟く。
「由乃、誰、その娘……」
「あ、令ちゃんこの娘は……」
と、由乃さんは途中で口籠もる。
「ふぅん。言えないような関係なんだ」
「そう言う訳じゃないけど」
「私にはちさととデートするなとか言っておきながら、自分はその娘と……」
「令ちゃん、違う！」
「問答無用!!」
令さまが本気で由乃さんに刃を打ち込む。
「何よ令ちゃん！　違うって言ってるじゃない!!」
由乃さんも負けずにに打ち込み返す。さっきまでは由乃さんだけが気迫を発していたが、今度は令さまも本気で打ち込んでいる。二人の殺気が祐巳達の所まで伝わってくる。
「いいなぁ。私も竹刀持ってくれば良かった」

菜々ちゃんはマイペースだった。

由乃さんと令さまの激しい打ち込み合いを、祐巳は呆気に取られて見ていた。巨大クリオネも、二人の気迫に押されたのか、おろおろしている。

「祐巳、今の内に変身だ」

「うわっ!?　祐麒、なんでここに？」

祐麒は家で留守番している筈。電車にだって乗れないし。

すると、祐麒はちらりと志摩子さんの方を向く。志摩子さんは和(にこ)やか笑って、手を振っている。

「まさか志摩子さん、クリオネ見たいって言ったのもわざと!?」

「さぁ、どうかしら？」

わざとだ。絶対にわざとだ。偶然を装(よそお)ってたけど、都内で気軽にクリオネを見る事ができるこの水族館に誘導したに違いない。祐巳は再び背筋が凍った。

「諦めろ祐巳。変身だ」

「でも、こんな所じゃ……」

「誰も見てないぞ」

「え？」

辺りを見渡すと、職員もお客さんも全員非難していて、誰もいない。唯一取り残されている令さまと由乃さん達は、姉妹喧嘩の真っ最中。こちらにかまっている余裕は無い。

「分かった……」

その内、人前で普通に変身するようになるんじゃなかろうか？　祐巳は一抹(いちまつ)の不安を覚えながら変身する。

ユーミに変身し、今度は自分が巨大クリオネに対峙する。クリオネのラブリーな頭部を見ていると、段々と緊張が解けてきた。

「だ、駄目……」

「どうしたんだユーミ？」

「こんな可愛いの、私攻撃できない……」

と言って、ユーミはうなだれる。

「な、何を言ってるんだ!?」

「だってぇ、あんなに可愛いんだもん」

そう言ってクリオネの頭部を指差(さ)す。ずっと見つめると、顔面が緩んでくる。

「そんな事言ってると、足下救われるぞ」

「そんなことないも～ん」

そう言って、ユーミはクリオネを眺めて和(なご)む。緊張感の欠片(かけら)も無い。

「あれ？」

暫くすると、クリオネの頭がぱっくりと二つに割れた。

割れた頭の中から、無数の触手がユーミに向かって伸びてくる。
「あれ、あれ？」
触手は立ち所にユーミの四肢を絡め捕って持ち上げる。
「きゃあああぁ！」
粘液で覆われ、ぬっとりと湿った触手は、さらにユーミの腰に、太股に幾重にも絡み付く。
「嫌ああぁっ!!」
ぞわわわわっ！　ぬめぬめ・ぬるぬるとした感触が直接太股を摩り、ユーミは背筋が痙攣した。服の上から絡まれている部分も、生暖かい粘液がじっとりと染み込んできて、気持ち悪い。
「ひぃぃぃ！」
さらに触手が首を一周したかと思うと、襟元の間から中に入り込む。太股を這っていた触手は、さらに奥まで達し、服の中から腰に巻き付いた。触手は、狭い袖口からも入って来ようとする。触手が無理やり服の内側に入り込んできたために、あちこちで破れる音がする。
触手が、ユーミを絡めたまま頭部に収納される。ユーミは全く身動きがとれないまま、クリオネの口に取り込まれた。クリオネの頭部から腹部がうねうねと動く。
少しして、クリオネの動きが止まる。腹部が段々と膨らんでいき、とうとうクリオネは木端微塵に砕け散った。そして中から、跪いて項垂れたユーミが現れた。苦しそうに肩で息をしている。
「はぁ、はぁ……　し、死ぬかと思った……」
助かったとは言っても、ユーミの身体は全身粘液まみれ。服は至る所が裂け、髪留めも片方が外れている。
「や、やぁ、ユーミ。無事で何より……」
顔と、前足が血まみれになった祐麒が、ふらふらとユーミの元に歩いてくる。
「うげ…！」
「あんた、人が死にそうになってた時に何鼻血出してんのよ！　変態!!」
ユーミは、近寄ってきた祐麒の首を思い切り絞めた。
（ユーミ、触手は男のロマン……）
「何が男のロマンや！　こっちはえろー苦るしかったんやから!!」
（な、中の人、中の人が出てる！　ん……）
祐麒が「落ちた」事に気づくと、ユーミは仕方なく淫獣を投げ捨てた。
フラフラになりながらユーミは立ち上がる。こびりついた粘液が滴り落ちる。辺りを見渡すと、由乃さんや令さま

達の姿はない。もう仲直りしたんだろうか？
「ユーミー、後は銀杏の回収よー」
声のした方に振り向くと、志摩子さんが遠く離れた安全圏から手を振っていた。
「親友、辞めようかな……」

「いらっしゃいませ。どうぞ見てってください♡」
「由乃さん、上手いわね」
「これでも学園祭で呼び込み係やってたんだから」
由乃は、いつの間にか令ちゃんのサークルスペースで売り子をしていた。それもちさとさんと一緒に。
「それにしても、令ちゃんが漫画描いてたなんて、私ちっとも知らなかった」
「苦労したでしょうね、隠すの」
「別に私に隠さなくても良いのに」
「それは、まぁ。私も両親には黙ってるし」
「そうなの？」
「だって、うちの両親厳しいし……」
「そっか、伯父さんも許しそうにないし」
人には色々事情があるようだ。
由乃は、令ちゃんが描いた漫画をパラパラと眺める。ストーリーは、機械獣に乗る少年に、巨乳で青い髪のお姉さんが迫ると言うものだった。アニメのキャラクターだと言うけれど、その少年がどことなく谷中さんの息子に似ているのが気になった。

あとがき

皆さんごきげんよう。PARALLEL ACT 主催者 TomOne です。つたない本を手に取ってくださってありがとうございます。夏コミ完成ができず、ようやくサンクリで完成版発行です。じっくりと時間をかけた分、満足できるものが出来たと思っています。

絵描きさんも台湾への一ヶ月の長期出張の後、サンクリの一週間前(笑)に帰って来て、一気に描いて貰いました。疲れている中、良い絵を描いてくれたロンゲ魔神K氏には本当に感謝しております。

前回は『君が望む永遠』とのパラレルでしたが、今回の本は魔法少女物です。遊んでます。考えてると結構構想が膨らんだので、前後編の分冊です。後編（仮題：お姉さまは魔法少女）は冬コミの予定です。原稿が早めに上がったり、踏ん切りがついたら前後編を纏めてオフセにするかも知れません。しない確率の方が高いですけど。

モチーフの魔法少女は色々ありますが、どこぞのエロゲー出身小学三年生が大きく入ってます。書いてる途中で、その続編に祐巳の中の人の出演が決定したりしてますが(笑)後編にはその中の人ネタが増えてるかもしれませんが、分かりません。何せまだ放送始まってないし。

後編は、少し話が暗くなるかも知れません。ちょっとシリアスです。いや、前編にも暗くなる箇所は幾つもありましたけど。

冬コミは、緒事情によりジャンルコードは二〇〇で申し込みました。即ち男性向けです。冬コミには何らかのエロ本がある予定です。何を題材にエロ本を書くかは未定です。多分マリみてか電脳天使だと思いますが。

ひょっとしたら後編がエロ本になってるかも知れません(笑)　今のところは十八禁描写は無い予定ですが、十三禁程度には……。頑張ってしないようにします(汗)　三奈子さまを見習って。

それでは、もっと面白い本が出せるように頑張りますので、冬コミでは、またお立ちより下さいませ。

’05年9月17日

TomOne

1975 年 6 月 28 日、熊本生まれ。蟹座、O 型。過去に『新世紀エヴァンゲリオン』『家なき子レミ』『救命戦士ナノセイバー』『学校の怪談』『天使のしっぽ』『電脳天使』の同人誌を発表する。

魔法少女りりかるユーミ

PARALLEL ACT SERIES

2005 年　8 月 13 日　第 1 版発行
2005 年　9 月 18 日　第 2 版発行

★定価はカバーに表示してありません

著　者　TomOne
発行者　村上智一
発行所　PARALLEL ACT

URI　http://kikyou.sakura.ne.jp/~tomone/
E–Mail　tomone@kikyou.sakura.ne.jp

印刷機　あなたのプリンタ

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替えいたします。まずは、当サークルにご連絡ください。
送料は当サークル負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもの、自ら印刷したものについてはお取り替え出来ません。